



Title	文屋康秀「吹くからに」と紀友則「雪降れば」の英訳について：身体化の観点から
Author(s)	権田，彩良
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2026, 2025, p. 133-141
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106342
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文屋康秀「吹くからに」と紀友則「雪降れば」の英訳について —身体化の観点から—

権田彩良

1. はじめに¹

『古今和歌集』は、醍醐天皇の勅命によって撰された最初の勅撰和歌集である。撰者は、紀友則、紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑の4名であり、延喜5(905)年に奏上された。収録された和歌が詠まれた時期はおよそ100年にわたり、20巻、1100首からなる。20巻のうち、四季が6巻、恋が5巻と、この2つが大きな柱になっている。和歌のほかに、仮名序と真名序の2種類の序文をもつ。掛詞、縁語、見立てといった修辞技法を駆使し、事柄や事物そのものではなく、それらに対する心の動きを詠むという表現方法の発達を見て取ることができる。(高田 2009)

『古今和歌集』の修辞のなかには漢詩の離合詩²の流れを汲んだものが見られ、それは一つの漢字を分解したものを一首の和歌に詠み込むという文字を利用した言葉遊びである。本稿では、『古今和歌集』収録歌のうち離合詩的発想で詠まれた2首³を取り上げ、その修辞技法を分析するとともに、これらの修辞技法がどのように英訳に反映されているかを観察する⁴。特に身体化(Lakoff 1987、池上他訳 1993)の観点からそれぞれの和歌とその英訳を分析することで、和歌を通して歌人が伝えようとした思いとその翻訳の試みについて検討する。

2. 和歌の英訳における課題

和歌の英訳について、藤原定家による詞華集『百人一首』を二度英訳しているマクミラン(2017)は、『百人一首』の翻訳の難しさとして、語呂合わせや言葉遊び、和歌ならではの修辞技法、それぞれの和歌の解釈の重層性、主語の問題や「五七五七七」という形式の問題を例に挙げている。このマクミランの指摘は、『百人一首』のみにとどまらず、和歌という文学作品を翻訳するすべての場合に当てはまるであろう。

村上スミス(2009)は、英語と日本語のように隔たりがある言語同士の翻訳では文法、語彙、語順などを重視する「形式的等価」が実現しにくく、また原文と翻訳文の比較において「形式的等価」を求めすぎると単なる誤訳の指摘に陥ってしまうと留意点を指摘している。一方、翻訳の「等価」の中でも、テキストが読者へ働きかける機能の等価を検討する「機能的等価」と「実践的等価」は、原文と翻訳文それぞれの文化的背景やそれぞれの読者も検討の対象になる。そのため、「機能的等価」と「実践的等価」の観点を援用することで、より丁寧に原文と翻訳文を比較することが可能になる。本稿は、和歌の英訳に原歌の離合詩的発想と離合詩の身体化がどれほど反映されているかを考察するという点で、和歌とその英訳が「機能的等価」「実践的等価」となっているかを検討するものであると言える。

3. 身体化

身体化は、「人間の生物学的能力の性質と物質的・社会的環境における活動経験の結果であるという考え方」(Lakoff 1987、池上他訳 1993: 13)である。人間の身体を通じた経験が心や言語に基盤を与えているとみなす経験基盤主義の立場において、人間は、「さまざまな生物学的能力、及び、われわれを取り巻く環境の中で機能する人間としてのわれわれの身体的、社会的特徴に基づいて」(Lakoff 1987、池上他訳 1993: 322)さまざまな概念を自らの身体を通して経験し、その多くを無

¹ 本研究は JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2138 の支援を受けている。

² 離合詩は六朝時代に流行した漢詩の形式で、「離合」とは主に漢字を偏・旁・冠などの漢字の成り立ちに従って切り離し、切り離したものを合成して別の字を構成するという意味を持つ。その始まりは、合成によって浮かび上がる漢字を隠喩とし、謎解きを楽しむことであった。(中谷 2011)

³ 『古今和歌集』における離合詩的発想の和歌は、今回分析対象とする「吹くからに」と「雪降れば」の2首であると指摘されている(高田 2009、片桐 2019)。

⁴ 本研究は、2024 年度春夏学期に大森文子教授が開講された「認知レトリック論研究 A」における筆者の担当発表の成果に加筆・修正を加えたものである。この講義は、「和歌に学ぶ認知レトリック」というテーマのもと、ピーター・J・マクミラン(2017)『英語で読む百人一首』の中から一首を選び、和歌のレトリックの分析およびマクミラン訳とその他の英訳の比較を行った。担当発表において、筆者は文屋康秀「吹くからに」を取り上げた。

意識のうちに理解している。

今回の分析では、詠み手がその身体で何を経験し、何を感じて和歌に詠まれた離合詩的発想に至ったかということについて身体化を通して考える。身体化の観点から和歌の離合詩的発想を解釈するとともに、英訳によって英語読者も原歌の読者と同じような経験や解釈に至ることができるかという点も考察する。

4. 文屋康秀「吹くからに」

4.1 和歌について

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらむ⁵ (文屋康秀)

この和歌は、詞書には「是貞親王の家の歌合の歌」とあり⁶、藤原定家が編んだ詞華集『百人一首』にも収められた。この和歌の主眼となる修辞技法は、「嵐」と「荒く激しい風」(島津 1969 : 56)を意味する「荒らし」の掛詞と、「山」と「風」の二文字を組み合わせると「嵐」になる離合詩的発想にある。この和歌の離合詩的発想について考えるために漢字の成り立ちに着目すると、「嵐」は形声文字で、「山」と音を表す「風」を組み合わせた漢字である。それぞれの部分について、「山」は、山を遠くから見たときの山の形をもとにした象形文字である。「風」は形成文字であり、音を表す「凡」は、風をはらむ帆の象形である。「風」のなかの「虫」は、風雲に乗る龍を表す(『新漢語林』)。特に「嵐」の一部である「風」の成り立ちから、「嵐」という漢字には風の激しさが含意されていることが分かる。

この和歌の解釈に関して、高田(2009 : 137)は、「吹くとたちまち秋の草木がしおれるので、なるほどそれで山嵐を『嵐』と書いて、『荒らし』というのだろう」と現代語に訳している。高田訳は、「山」と「風」で「嵐」という字になるという離合詩の部分と、それが「荒らし」と同音であるという掛詞を現代語訳に反映させている。また島津(1969 : 56)は、「吹くとたちまちに、秋の草木がしおれてしまうので、いかにも、山から吹きおろす風のことを、荒い風といっているのであろう」と現代語に改めている。島津訳は、「嵐」という語を用いず、「山風」と「山から吹きおろす風」(下線は筆者による)と表現した。「山」の下に「風」を配置すると「嵐」という漢字になることが暗示されているように思われる。

そしてこの和歌は、音韻の面でも嵐の激しさを伝える工夫が見られる。小池(2023 : 63)は、この和歌の音韻に関して「この歌には意味よりもすぐれて、なにしろ語感の快感がある」と述べ、初句と第2句ではカ行音が連続していることや、第3句ではラ行音が続くことなどを挙げている。小池(2023 : 63)は続けて、「幾度か読むうちに、この単純な歌のなかに、風の音がおこり、嵐が一陣、通り過ぎるのを聴く。言葉の葉音がおこした風だ。あとには何も残っていない。寂とした気配が漂っている」と、嵐の後の様子の寂しさや趣深さにも言及している。以下は、和歌を現代仮名遣いのひらがなに改め、句ごとにスペースを空けたものである。

ふくからに あきのくさきの しおるれば むべやまかぜを あらしというらん

小池の指摘のように、特に初句と第2句にカ行音が頻出し(下線部)、第3句から第4句にかけて「ば」「べ」「ぜ」という濁音の連続によって語調が整えられている。第3句のはじめと第5句に含まれる「し」(太字)は無声の摩擦音であり、風が吹く様子と息の流れが重なるほか、第3句に流音であるラ行音の「る」「れ」が連続することも風の流れを想起させる。すぼめた唇から強く息を出す「ふ」の音で始まり、風の流れを感じさせる「し」や流音を経て唇を閉じる「ん」の音で終わる(囲み部)ことによって、勢いのある嵐の様子と、嵐が去った後のしんとした様子が想起され、「秋の野分のあわれ(島津 1969 : 56)」を感じることができる。小池(2023 : 63)が「嵐が一阵、通り過ぎる」音、「言葉の葉音がおこした風」、「寂とした気配」と表現したのは、このような音韻的特徴であると考えられる。

⁵ 『古今和歌集』巻第五・秋歌下・249

⁶ 本歌は、康秀の息子・朝康の作であろうという説があり、高野切をはじめとする有力な写本では朝康の作とするものが多い(片桐 2019)。

島津 (1969 : 56) は、藤原定家が『百人一首』にこの和歌を加えた理由を「ただ言語的興味にとどまらず、秋の野分のあわれをこの歌から感じとっていたのではなかろうか」と推測している。小池 (2023) の音韻に着目した評からも、この和歌は言葉遊びの面白さと季節の情趣をうかがえるものであると言える。

身体化の観点からこの和歌を鑑賞すると、この和歌における身体的環境は秋の嵐の中である。この時、強い風の皮膚感覚、嵐になぎ倒される草木の視覚的な様子、そして強い風によって草木が折れる音が詠み手の五感に訴えかける。この時に詠み手が聞いた草木が折れる音は、和歌中のカ行音の連続や「ば」「べ」の破裂音に表象される。この和歌に描かれた情景の中で、詠み手は、植物の命が脅かされるほど激しい風への畏敬の念や、嵐の後には何も残らないという寂しさを感じる。詠み手は、秋の嵐を身体的に経験し、その恐ろしさを肌で感じることで、「むべ山風を嵐といふらむ」という納得に到達する。詠み手が山よりも低い位置で強い風を感じるという位置関係から、「山」に「風」で「嵐」なのだという文字の成り立ちを感じ、そして後には何も残らない様子から、強い風が山を「荒らし」たから「嵐」なのだ、という掛詞も身体的に経験する。単に「嵐」という漢字は山と風からなる」という漢字の構成の気づきにとどまらず、詠み手の身体的経験によって「風」の上に「山」があるから「嵐」であるという漢字の構成要素の関係にも意識が及ぶという点に、離合詩としてのこの和歌の面白さがある。

4.2 英訳の比較

「吹くからに」は、『百人一首』にも収録されていることから多数の英訳がなされている⁷。中には、離合詩の発想について注釈がつけられたものも見られる。ここでは、そ数ある英訳の中から Porter (1909)、斎藤 (1909)、若目田 (1929)、本多 (1970)、McMillan (2008) を取り上げ、英訳がこの離合詩の発想をどのように英訳しているかを考察する。

4.2.1 Porter (1909)

THE mountain wind autumn time
Is well called 'hurricane';
It hurries canes and twigs along,
And whirls them o'er the plain
To scatter them again

The point of this verse lies in the ideographic characters of the original; *yama kaze* (mountain wind) being written with two characters, which, when combined, form *arashi* (hurricane), and this, of course, it is quite impossible to reproduce correctly in the translation.

Porter 訳は、「山風を嵐といふらむ」の離合詩的発想を英訳に反映させようと努めた英訳の一つである。「嵐」の訳出に“hurricane”を用い、それを発音が同じ“hurry”と“cane”の2語に分解することで、2つの要素が1つの意味になる「山風」と「嵐」の関係を踏襲している。この訳では、英語読者も原歌の読者と同じように離合詩的発想を単語の構成の面から体験することができる。

訳出にあたって選択された“hurricane”は強風を意味するため、原歌で掛詞となっている「荒らし」も含意されている。そして“whirl”と“plain”によって、空間的な広さと風の勢いの強さをイメージできる。音韻の面では、“hurricane”、“plain”、“again”が脚韻を踏んでいるほか、“hurricane”や“scatter”の[h]音や[s]音は、原歌の「し」の音や流音と同じように空気の流れを感じさせる。

4.2.2 斎藤 (1909)

As, when it blows,
Th' autumnal flowers o'er hill and dale
Are bent and maul'd,
Well may the furious mountain gale
A “storm” be called!

⁷ オルショヤ (2018) は、本の形になり出版された『百人一首』の完訳が、1865年のF. V. Dickins訳に始まり2017年のPeter J. McMillan訳にかけて26種類あると述べている。

斎藤訳は、2行目と4行目は[eil]の脚韻を踏んでいるほか、“flower”と“furious”と語頭が[f]音の単語がおそらく意図的に配置されている。この配置は、[f]音から始まる空気の流れが行末の[l]音で止まったように感じられ、このような空気の流れは“storm”という単語を発音するときの空気の流れと共通している。空気が流れる音から始まり、空気をせき止めるような音で行や単語が終わるという点は、原歌の「ふくからに...嵐といふらむ」という一首の中での空気の流れと類似し、強い風が吹き、最後には秋の草木が「しおる」しんとした様子のみが残るといった雰囲気を音韻の面で反映し、英語読者にもその様子を体験させると考えられる。

4.2.3 若目田 (1929)

The leaves of autumn grass and trees grow pale
And withered in the blowing blast:
The mountain wind may well be called a gale,
That brings them to decay at last.

若目田訳の大きな特徴は音韻から想起される離合詩的発想にある⁸。1行目の“grass”と“grow”は、[gr]音が共通し、破裂音と流音の連続が、風の様子とその破壊力の大きさを暗示する。そして詩の中では“pale”と“gale”による[eil]の脚韻が踏まれ、[ei]の音は5行目の“decay”にも含まれている。詩を朗読する際に強く発音する[ei]の音を含む“pale”、“gale”、“decay”は、原歌にも共通する主題である。これらの3語は、「秋になると草木が色褪せ (pale)、それらが強い山風によってなぎ倒され吹き飛ばす (decay) から山風を嵐 (gale) と呼ぶ」という連想を促し、「山から強く吹きおろす風だから嵐という」という離合詩的発想と経験を英語話者にも経験させるものと言える。

4.2.4 本多 (1970)

The high wind comes in autumn, and
obedient to his highness,
leaf and grass both wither.

本多は、1956年には『百人一首』収録歌として、そして1970年には『古今和歌集』収録歌としてこの和歌を二度英訳している⁹。上記に引用した1970年の英訳では、“high”の多義性が大いに活かされている¹⁰。“high wind”は、「激しい風」「上から下へ垂直方向に吹く風」という解釈が可能であり、これは「荒らし」と「嵐」の掛詞を巧みに英語に反映させている。“high”の持つ「高い」「激しい」「上下関係における上位」という多義と“his highness”という擬人化表現からは、荒ぶる自然の力が草木をなぎ倒す「荒らし」が連想される。この本多訳は、原歌の「山風を嵐といふらむ」を直接英訳するのではなく、“high”と“highness”という語形変化反復 (polyptoton) によって、“high”をキーワードとし、強い風が植物をなぎ倒しながら詠み手よりも高いところにある山から吹きおろしてくるという、「嵐」の中の「山」と「風」の位置関係を英訳に反映させ、それによって英語読者にも離合詩的な体験を与えている。

4.2.5 McMillan (2008)

The mountain wind
has just to blow

⁸ 若目田訳の解釈の多くは大森文子教授にご教授いただいた。

⁹ 本多の1956年の訳を以下に挙げる。

Tree leaves and grass from withering die
When mountain winds come in the fall.
And well the wind may be called high
That comes down blowing over all.

この英訳においても、“high”を多義的に解釈することが可能であり、読者は「上から吹きつける強風」つまり「嵐」を体験する。

¹⁰ この観点は、大森文子教授にご教示いただいた。

and grasses of autumn
wither and die.
That must be why
the character for 'storm'
also means 'destroyer'!

This *waka* plays on the idea that the Chinese ideograph for “storm” (*arashi*: 嵐) is made up of the character for “mountain” (山: *yama*) above the character for “wind” (*kaze*: 風). Therefore it is natural that mountain winds should be called storms. The wit lies in the punning of the word *arashi* (storm) with the word *arasu* (to wrack or destroy). These kinds of witty interpretations were based on Chinese court-style poetry of the Six Dynasties (220-581), but it was not to the taste of Teika and others, who required a more serious emotional base for *waka*. One may reasonably presume that Teika and later readers rejected the original conception of the poem and read it as an atmospheric poem about the desolate feeling associated with a windswept autumn landscape as expressed in the version above. A more literal version, closer to the Chinese interpretation, would be something like: “The mountain wind / has just to blow / and the leaves and grasses of autumn / wither and die. / So that is why the elements / “wracking,” “mountain,” “wind” / make up the word for “storm.”

McMillan は、『百人一首』の英訳として本歌を二度翻訳している¹¹。この英訳の特徴は、4 行目 “the character” 以下で漢字の構成を英訳に盛り込み、注で実際の漢字の形を見せながらこの和歌の主眼となる離合詩的発想を伝えようとしている点である。McMillan 訳は、日本の漢字を説明する機能をもった英訳となっている。

また、McMillan 訳は、秋の強い風が草木をしおれさせる様子から、“storm”を表す「嵐」が“destroyer”つまり「荒らし」であることを描写している。この表現によって、読者は、詠み手が感じた風の強さを追体験する。McMillan 訳は、「荒らし／嵐」の掛詞を英語読者にも伝わるように身体化した例であると言える。

ここまで、Porter (1909)、斎藤 (1909)、若目田 (1929)、本多 (1970)、McMillan (2008) による 5 つの訳を取り上げ、それらの特徴を観察した。特に Porter 訳は、「嵐」の訳出に “hurricane” を用い、それを発音が同じ “hurry” と “cane” の 2 語に分解することで、2 つの要素が 1 つの意味になる「山風」と「嵐」の関係を踏襲しているという点において、原歌の離合詩的発想を英語に持ち込むことに成功していると言える。語の成り立ちから “hurricane” というものを理解するという経験から、Porter 訳を読んだ英語読者は原歌の読者と同じような納得を感じることができであろう。斎藤、若目田、本多訳では、音韻や語の選択から自然と離合詩的発想を英語読者も追体験できるような工夫がなされていた。McMillan 訳は「嵐」という漢字の成り立ちを英訳に盛り込み、注でその意味するところを解説している。英訳に反映させることが難しい漢字の成り立ちを注で実際に見せるというのは、英語読者にも離合詩的発想を伝えるひとつの方法だと考えられる。これらの訳を比較したとき、原歌と同じように 2 つの語の組み合わせで主題となる単語が浮かび上がる形式での英訳を試みた Porter 訳が特に「機能的等価」「実践的等価」の観点で優れていると筆者は考える。

5. 紀友則「雪降れば」

5.1 和歌について

雪降れば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきて折らまし¹² (紀友則)

¹¹ 以下にマクミラン (2017) の訳を挙げる。

In autumn the wind has only to blow
For leaves and grasses to perish.
That must be why the characters
'mountain' and 'wind'
Together mean 'gale.'

2017 年の訳においても、マクミランは、「山」という字と「風」という字を組み合わせると「嵐」になる、という漢字の構成を伝える英訳を試みている。2008 年版では “destroyer” とされていた「荒らし／嵐」は、2017 年版では “gale” と英訳されている。離合詩的な発想の観点では、“mountain” と “wind” という 2 語から “gale” が自然と想起されることを竹森ありさ氏からご教示いただいた。

¹² 『古今和歌集』巻第六・冬歌・337

この和歌は、木の枝に雪が積もったことでそれが白梅に見えるという見立てを用いた歌である。高田（2009：171）は、「雪が降るとどの木にも花が咲くのだな。どれを梅と見分けて折ることができるだろう」と現代語訳し、「木ごと」は「木毎」と書くことで「梅」になることを指摘している。片桐（2019：1082）は、「雪が降ると、あの木、この木と、木毎に花が咲いたようになるよ。いったいどの木を梅と判別して折ったら折ることができるのだろうか。折れそうもないよ」と現代語に改めた。片桐訳は、「いづれ」と「まし」の呼応に表れた「早咲きの梅と梅を区別することなどできそうもない」という詠み手の気持ちを反語の形で現代語訳に反映させている。

この和歌は冬歌に分類され、片桐（1991：8）は、「春を望み花を願う思いは『古今集』における大きなテーマだった」と述べている。『古今和歌集』第六巻の冬歌には29首が収められ、そのうち323、324、330、331、334、335、336、337（337が「雪降れば」）と、雪を花に見立てる歌が続いている¹³。現在よりも遥かに寒く、また住宅や栄養の面でも現代より厳しいものであった当時の冬、「思わずに『雪』が『花』に見えるということは、『花』を切望する思いがそれだけ切実であったということに他ならず、「春を待望することがあまりに切実であるゆえに、冬の部であるのに、花に思いを寄せる歌がこのように並んでいる」と片桐（1991：4-5）は説明する。目の前にある対象を詠むのではなく、それに寄せる切実な思いを詠むところに『古今和歌集』の特色があるとまとめる点は、片桐（1991）も高田（2009）も共通している。

身体化の観点では、詠み手は梅が咲いている冬の時期に、寒さを感じながら枝に積もった雪を見ている。本来は花のない、あるいは早咲きの花のみの寂しい冬の木に雪が降り積もることで、まるですべての木に白梅が咲いているように感じられ、それが詠み手の心に春の訪れのような暖かさをもたらす。雪によって、「木ごと」つまり「この木にもあの木にもすべて」（小島・新井〔校注〕1989：111）梅の花が咲いているように見えるという体験が、離合詩的発想と和歌がもたらす感動につながっている。

5.2 英訳について

ここでは、若目田（1929）、本多（1979）、Rodd（1984）、McCullough（1985）による英訳を取り上げ、離合詩的な発想の英訳について検討する。

5.2.1 若目田（1929）

When we have snow
The trees all blow;
So I cannot say
Which is the plum-bough,
Nor pluck it away.

若目田訳では、“snow”と“blow”、“say”と“away”の脚韻のほか、“plum”と“pluck”という音が類似した単語が選択されている。“The trees all blow”という表現によって、「木ごとに花ぞ咲きにける」という、雪を花と見る様子が際立つ。若目田訳では、「見分けることも折ることもできない」ほどの雪と梅の花の視覚的類似性を強調している。“The trees all blow”の“all”は、雪によってすべての木に花が咲いているようであるという詠み手の離合詩的な感動を英語読者にも伝えている。

5.2.2 本多（1970）

Which spray to take I do not know,
for all plum trees are decked with snow.

¹³ 323 雪ふれば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞさきける（紀貫之）
324 しらゆきのところも分らずふりしけば巖にもさく花とこそ見れ（紀秋岑）
330 冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらん（清原深養父）
331 冬ごもり思かけぬを木の間より花と見るまで雪ぞふりける（紀貫之）
334 梅花それとも見えず久方の天霧る雪のなべてふれれば（伝承では柿本人麻呂の作）
335 花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人の知るべく（小野篁）
336 梅の香のふりをける雪にまがひせば誰かことごと分きておらまし（紀貫之）

本多訳は、和歌を 5 行詩として訳出している他の訳とは異なり、上の句と下の句の分かち書きのように 2 行で訳出している。"know"と"snow"の脚韻のほか、"spray"と"take"に[ei]の音が共通し、見ているものは雪であってもそこに白梅という春を感じる明るさが感じられる。本多訳は、この情景の中の木をすべて梅の木と明示している点に原歌や他の訳との違いが見られる。すべての木が雪で覆われたことすべての木に梅が咲いているように見え、雪と本物の花の区別がつかないほどであるという感動は、本多訳にも表れていると言える。

5.2.3 Rodd (1984)

when snow has fallen
flowers appear on all the trees
clusters of white
blooms from which of them can I
pluck the fragrant plum blossoms

The characters for "goto" (each) and "ki" (tree) combine to form the character for "ume" (plum).

Rodd 訳において、見立ては"when snow has fallen/ flowers appear"と"clusters of white/ blooms"において訳出されている。Rodd 訳は、「どれを折ればよいか分からない」よりも「どれを折ればよいだろうか」という詠み手の態度に着目し、片桐 (2019) の現代語訳に反映されていた「いづれ」「まし」の呼応に表れるためらいの態度も表出されている。そして"fragrant"という香りに関わる単語が用いられ、ただ雪が積もっただけの枝と梅の枝を区別している。"fallen"、"flowers"、"fragrant"と、和歌の主題に関わる単語の語頭が[f]音で統一されていることには、主題提示音分散 (hypogram) (渡辺 2024) を見ることができる。Rodd 訳は注釈で離合詩の発想を説明しているが、このように漢字の成り立ちを説明したとしても、偏と旁からなる漢字の構成の説明や実際の字形の提示なしには英語読者にとって理解が難しいように思われる。しかし、"flowers appear on all the trees"からは、降雪によってすべての木、つまり「木ごと」に梅の花が咲いたようである、という離合詩的な発想から得られる感動は、Rodd 訳からももたらされるであろう。

5.2.4 McCullough (1985)

After the snowfall,
flowers have burst into bloom
on every tree.
How am I to find the plum
and break off a laden bough?

McCullough 訳では、雪から花への見立てが"After the snowfall/ flowers have burst into bloom"と訳出されている。"laden bough"という表現は、雪が積もった枝という解釈のほか、梅の香り¹⁴に着目し、「香る枝」で梅を表すメトニミーであると読むこともできる。離合詩的発想に関する注釈はないが、「木ごと」を"every tree"と訳出することで、「木ごと (木毎)」の並びを再現しているとも考えられる。2 行目の"burst into bloom"と 5 行目の"break off a laden bough"には、破裂音である[b]の連続があり、雪によってどの木にも一斉に花が咲いたようであるという勢いが感じられる。この[b]音の連続を含む"flowers have burst into bloom"には、冬の寒い中でも木に積もった雪によって花を見たような気持ちになることができるという喜びが感じられ、冬であっても花を見たような温かい気持ちになるという原歌の詠み手の心情と同じものをを読み取ることができる。

ここまで、若目田 (1929)、本多 (1979)、Rodd (1984)、McCullough (1985) による 4 訳それぞれ

¹⁴ 『古今和歌集』の中で「雪降れば」の 1 つ前と 2 つ前の和歌は、注 11 にも挙げた「花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人の知るべく」(小野篁) と「梅の香のふりをける雪にまがひせば誰かことごと分きておらまし」(紀貫之) である。「梅と雪は色が同じでも、せめて香りによって梅の花の存在を知らせてほしい」という小野篁の歌に対して、紀貫之は「本当にそうだ、香りまで雪と梅が似ていたら梅の枝をそうと分かって折ることができないではないか」と応じている (片桐 2019 : 1078-1080)。いずれも白梅と雪の視覚的類似に対して嗅覚を引き合いに出すことで梅と雪を区別した和歌である。

れの特徴を観察した。「吹くからに」の英訳とは異なり、いずれも英訳の中には「木」と「毎」で「梅」という字をなすという漢字の構成を含めず、雪を白梅に見立て、それによって春の訪れと同じような喜びを感じるという詠み手の喜びが英訳に反映されていた。詠み手に見えているすべての枝に降り積もった雪が白梅に見えるという視覚的な情景と、それが春の喜びをもたらすという詠み手の心情を描いているという点は、どの英訳にも共通している。原歌の「木ごと」を”all trees”や”every tree”と英訳することで、雪が広く積もった情景を描写し、それによって梅が満開になったように思われる喜びを含意されることから、「機能的等価」「実践的等価」が達成できていると考えられる。

6. おわりに

本稿では、『古今和歌集』収録の「吹くからに」「雪降れば」の2首を、身体化の観点から解釈し、詠み手が経験したものが英訳にも反映されているかということを検討した。今回取り上げた英訳では、離合詩的発想を英訳する際に、英訳とは別に注を付ける、音韻的特徴によって主題を提示する、語の組み合わせや語順の工夫によって反映させるという工夫が見られた。離合詩的発想に基づいた和歌だからといって必ずしもその漢字の成り立ちを英訳に盛り込む必要はなく、詠み手が五感で経験した情景やそれによって発生した感情をいかに英訳に反映させるかという観点からの英訳が「機能的等価」「実践的等価」であり、今回観察した英訳それぞれに「機能的等価」「実践的等価」を達成するための工夫が見られた。和歌の英訳において、和歌を構成するすべての要素を忠実に英訳することも方法のひとつであるが、英語読者がもつ経験や文化的背景を踏まえながら原歌の詠み手が感じた納得や感動を追体験させる「機能的等価」「実践的等価」も、和歌の世界への理解や没入を促す翻訳として有効であると考えられる。

参考文献

- オルショヤ・カーロイ (2018) 「『百人一首』の英訳史—1984年からの訳を中心に」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』 pp.85-104、同志社女子大学大学院文学研究科
- 片桐洋一 (1991) 『古今和歌集の研究』 明治書院
- 片桐洋一 (2019) 『古今和歌集 全評釈 (上)』 講談社
- 小島憲之 (1965) 『上代日本文学と中国文学 下』 塙書房
- 小島憲之・新井栄蔵 [校註] (1989) 『新日本古典文学大系 5 古今和歌集』 岩波書店
- 小池昌代 [訳] (2023) 『百人一首』 河出書房新社
- 小西甚一 (1949) 「古今集の表現の成立」『日本学士院紀要』 7 (3)、pp.163-198、日本学士院
- 斎藤秀三郎 (1909) 『百人一首：句々対訳』 興文社。(国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/874032>) (2026年5月16日閲覧)
- 島津忠夫 [訳注] (1969) 『新版 百人一首』 角川書店
- ジョージ・レイコフ [著]、池上嘉彦・河上誓作ほか [訳] (1993) 『認知意味論』 紀伊国屋書店
- 高田裕彦 [訳注] (2009) 『新版古今和歌集 現代語訳付き』 角川書店
- 田辺聖子 (1991) 『田辺聖子の小倉百人一首』 角川書店
- 中谷征充 (2011) 『漢詩を通じて弘法大師の生涯を繙く』 高野山出版社
- ピーター・J・マクミラン (2017) 『英語で読む百人一首』 文藝春秋
- 本多平八郎 (1956) 『英訳 百人一首』 北星堂書店
- 本多平八郎 (1970) 『英訳 古今和歌集』 北星堂書店・英林社
- 村上スミス・アンドリュース (2023) 「翻訳手順の『補償』：翻訳で失われたものを補うために」『レトリックと文法 (言語文化共同研究プロジェクト 2022)』 pp.27-48、大阪大学大学院人文学研究科
- 若目田武次 (1929) 『古今集』 有朋堂書店
- 渡辺輝道 (1986) 「古今和歌集の表現」『表現学大系 各論篇第一巻 和歌の表現』 pp.65-118、教育出版センター
- 渡辺秀樹 (2024) 「英詩における主題提示音分散(hypogram)再考：HerrickとWordsworth、ShakespeareとBlakeの比較から」『こちら側とあちら側のレトリック—メタファー・翻訳・認知— (言語文化共同研究プロジェクト 2023)』 pp.15-23、大阪大学大学院人文学研究科
- McCullough, Hellen Craig. (1985). *Kokin Wakashū The First Imperial Anthology of Japanese Poetry*. Stanford University Press.

- McMillan, Peter. (2008). *One Hundred Poets, One Poem Each— A Translation of the Ogura Hyakunin Isshu*. Columbia University Press.
- Porter, William. (1909). *A Hundred Verses from Old Japan —being a translation of the Hyaku-nin-issu*. The Clarendon Press.
- Rodd, Laurel, Rasplica. (1984). *Kokinshu A Collection of Poems Ancient and Modern*. Princeton University Press.

辞書

- 『新漢語林』 第二版 (2011)、大修館書店
- Oxford Dictionary of English*. Second Edition Revised. (2005). Oxford University Press.